

麦類赤かび病防除対策について

平成19年産の麦類は冬期の気温が平年より高く推移したため生育が早く、出穂期も平年比1週間程度早まっています。

小麦の出穂から開花までの日数は、4月に入り気温が平年に比べて低めに推移していることから長くなることが予想されます。小麦の開花は気温が高いほど早まりますが、出穂後の平均気温の積算値で概ね160で開花に至るものとして、防除時期を策定してください。

なお、大麦は小麦と比べて出穂後開花までの日数が短く（通常3～4日）、低温下でも開花し、低温による遅れの度合いも短い特徴があります。

表1 小麦「農林61号」の出穂期（京都府農業総合研究所作物部調査）

本年	平年	対平年比較
4月19日	4月26日	7日早

播種日：11月9日

場所：農業総合研究所（亀岡市）

向こう1か月の天候は、気温、降水量及び日照時間は共に平年並と予想されています（平成19年4月20日大阪管区气象台発表）。

1 防除上の注意事項

(1) 麦類防除最適期は開花初期～開花最盛期です。

本病の防除薬剤は予防効果が主であるため、散布時期が遅れないよう注意してください。

(2) 開花期から2週間以内に雨が多いと発病が多くなります。開花は出穂からおおよそ1週間後です。

出穂期は、品種、播種時期、栽培条件で異なるため、出穂や開花状況をよく観察した上で防除適期を判断してください。

(3) 六条大麦は特に発生しやすいです。

- (4) 近年、赤かび病による被害粒混入基準が厳しくなりました。赤かび病菌は人畜に作用性の強いカビ毒(デオキシニバレノール(DON)、ニバレノール(NIV))をつくります。
- (5) ほ場の水はけが悪いと生育・出穂が不揃いとなり、防除効果が低下しやすいので、出穂前にはほ場の排水対策を実施しましょう。

2 農薬使用の注意事項

- (1) 本病防除の主要薬剤であるチオファネートメチル(商品名: トップジンM)は、平成17年に**麦類での使用回数が出穂期以降1回に、また、大麦では使用時期が収穫30日前までに**変更されているので注意してください。
- (2) 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準や注意事項を遵守してください。
- (3) 農薬を散布する場合は、飛散(ドリフト)防止に十分気をつけましょう。
- (4) 農薬は最新の登録情報(農林水産省ホームページの「農薬コーナー」ホームページアドレス <http://www.maff.go.jp/nouyaku/>)を確認し、適正に使用しましょう。

表2 ムギ類赤かび病に対する主な登録薬剤

	薬剤名	使用濃度・量	使用時期・回数	備考
地上防除	トップジンM粉剤	4kg/10a	収穫14日前/1回*	小麦
	"	"	収穫30日前/1回*	麦類(小麦以外)
	トップジンM水和剤	1000~1500倍	収穫14日前/1回*	小麦
	"	"	収穫30日前/1回*	麦類(小麦以外)
	ワークアップ粉剤DL	3kg/10a	収穫14日前/2回	小麦
	ワークアップ乳剤	1000~1500倍	収穫14日前/2回	小麦
	チルト乳剤25	1000~2000倍	収穫3日前/3回	小麦
	"	"	収穫21日前/1回	大麦
	トリフミン水和剤	1000~2000倍	収穫14日前/3回	麦類
	トリフミン乳剤	1000倍	収穫3日前/3回	小麦
	イオウフロアブル	400~800倍	収穫-日前/5回	麦類
	ベルコート水和剤	1000~2000倍	収穫21日前/1回*	小麦
	ベフラン液剤25	1000~2000倍	収穫21日前/1回*	小麦
ベフトップジンフロアブル	800~1000倍	収穫14日前/1回*	小麦	
無人ヘリ	トップジンMゾル	4倍0.8 $\frac{L}{a}$ /10a	収穫21日前/1回*	小麦
	"	"	収穫30日前/1回*	麦類(小麦以外)
	チルト乳剤25	8倍0.8 $\frac{L}{a}$ /10a	収穫7日前/3回	小麦
	"	"	収穫21日前/1回	大麦

* : 出穂後の使用回数

イオウフロアブルは、多発条件では効果が劣ることがあるので、所定範囲の高濃度(400倍)で使用する。